

新造神輿製作工程

協力：南部屋五郎右衛門



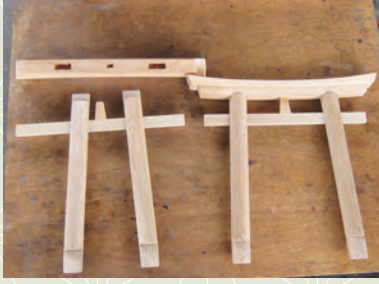
御神輿ができるまで(南大井第四町会)

1 木地製作

神輿の骨格とも言える木地。神輿のパーツ毎に、けやき櫻材やすけ桧材などを使い分けて製作しています。品川近辺で定番の城南型の御神輿は、台輪には樺穴を開けず、台輪の下の泥摺り部分を加工します。木地は約3ヶ月を掛けて製作されました。

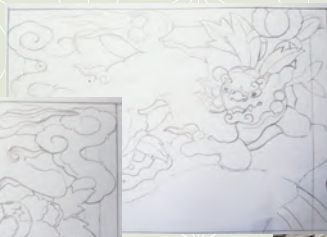
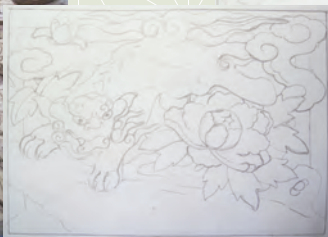


台輪や柱・むらびて蕨手の入る箇所は、力が掛かる部分のため、硬い材料の櫻材を使用しております。また、台輪は表側だけでなく裏側も目のしっかりした部材を使用しています。未永く使用できるように、材料にこだわって製作しています。



2 彫刻製作

胴周りに等の彫刻は、平らな一枚のけやき櫻の板から製作されます。彫刻の入るスペースに合わせて絵図を描き、それに沿って荒彫りし、最後に仕上げ彫りをし、色付をして完成となります。製作には約3ヶ月の期間を要しました。



この道50年の熟練の彫刻師によって製作された彫刻は、主に胴周りに付いています。神輿の前後の戸脇と呼ばれる部分には「昇降龍」の彫刻、胴の左右には獅子と牡丹が彫られた「堂羽目」と呼ばれる彫刻、長押の上には「鶴」の彫刻、長押の下には「波に千鳥」の彫刻が付いています。何十本という鑿を巧みに使い分けて製作された深彫りの彫刻です。



3 金具製作

鋳り金具を製作するため、出来上がった木地から型紙を製作します。様々な種類の鑿たがねなどを駆使し、型紙に合わせた真鍮板に絵柄を刻んでいきます。また、台輪や蕨手・大鳥の胴などは鋳物師が製作します。製作には約3ヶ月の期間が掛かりました。



大棒(担ぎ棒)の先端に取り付ける棒先金具は神酒所では取り付けておき、実際に担ぐ際には取外したいとのご要望があったため、今回は本来の鋳物製棒先金具ではなく、厚めの真鍮板を加工し、特製の棒先金具を製作しました。1枚の平らな真鍮板に鑿などを使って柄を入れ、その後長方形の筒状に加工し、メッキ加工を施して棒先金具となりました。



葺返しふきかえと呼ばれる屋根の四面に取り付けられる金具は、棒先金具の製作と同様に、1枚の真鍮板から製作します。打出しと言われる彫金技法を使い、手彫ならではの重厚感があります。

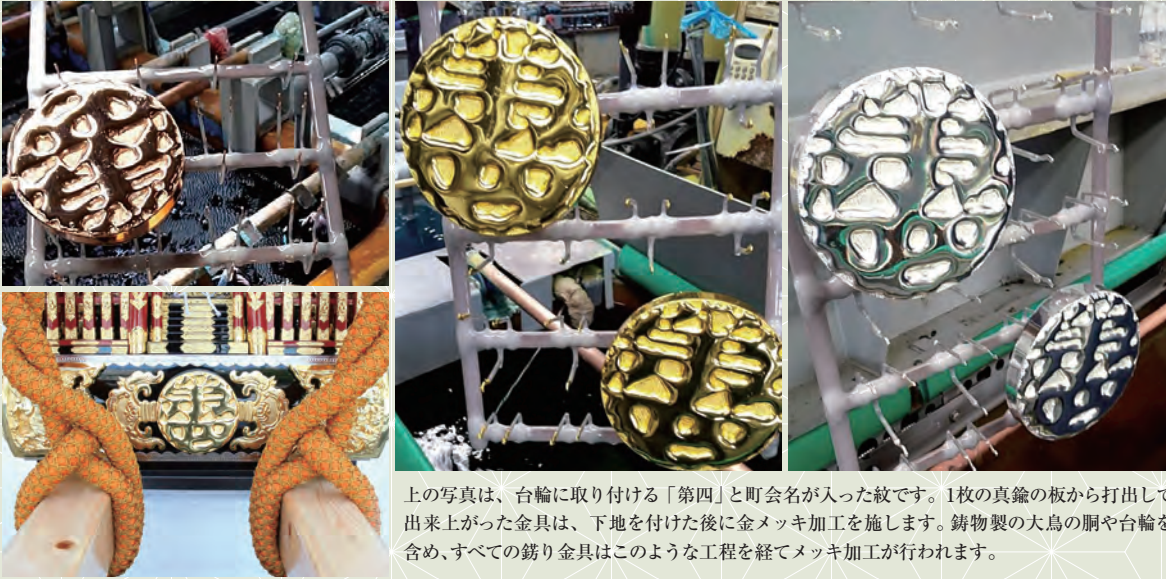


打出し金具は葺返しふきかえの他、台輪に取り付けられる台輪紋や出し花にも使われております。大鳥の羽根や尾、屋根に付ける金具、胴に付ける金具、鳥居に付ける金具、台輪紋などはすべてベテランの鋳り金具職人が1点1点丹精込めて製作しました。この神輿には約1,800点にも及ぶ金具が使用されています。



4 メッキ加工

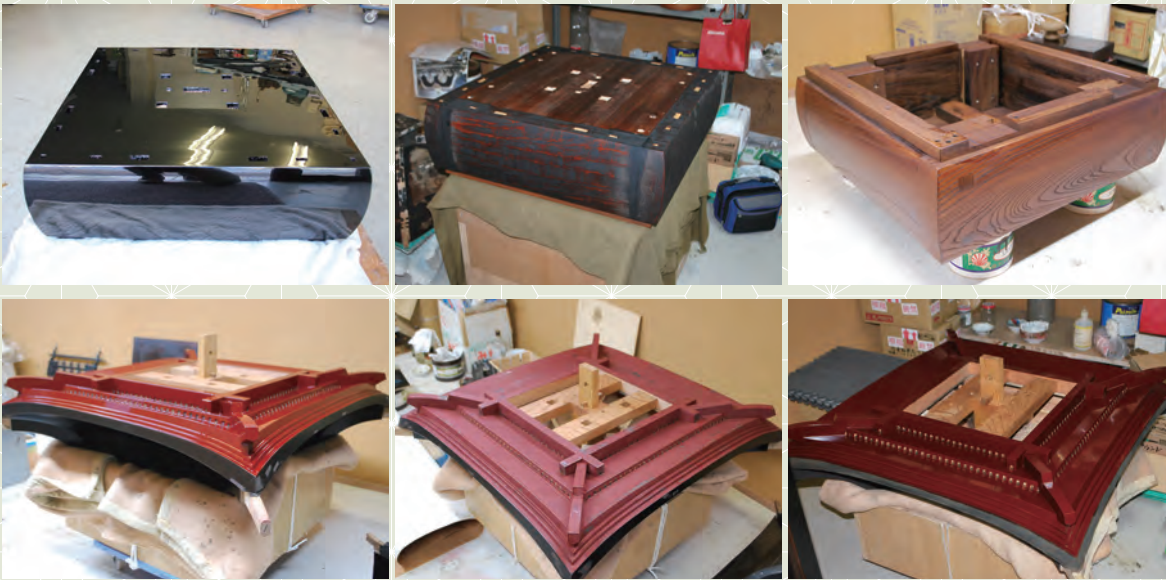
金具は完成した後メッキ加工に入ります。メッキが付きやすいよう金具に磨きをかけた後、金色や銀色のメッキ加工を施します。神輿の随所にメッキ加工を施された金具が取り付けられると、豪華で華やかさが加わり完成へと近づきます。



上の写真は、台輪に取り付ける「第四」と町会名が入った紋です。1枚の真鍮の板から打出して出来上がった金具は、下地を付けた後に金メッキ加工を施します。鋳物製の大鳥の胴や台輪を含め、すべての鋳り金具はこのような工程を経てメッキ加工が行われます。

5 塗り

金具製作に必要な型紙を取り終えた後、木地は漆師へ渡されます。下塗りをを行い、その後塗り・研ぎの工程を数回繰り返し、最後に上塗りを施し、完成となります。漆塗りは約100日を掛けて、丁寧に塗り上げられました。

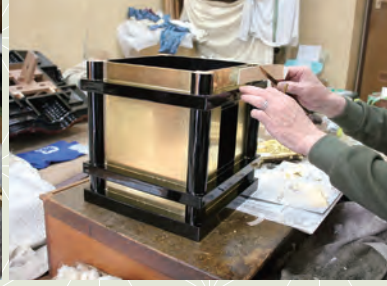


屋根や台輪は、木の継ぎ目が割れないように布を張ります。漆塗りは、塗り・研ぎの工程を複数回繰り返し、丈夫な下地を作り上げます。上塗りをを行い、温度・湿度を調整した乾燥室に入れて完成となります。漆の塗りは厚すぎても薄すぎても、金具を打ち付ける際に支障をきたします。屋根や台輪の黒い漆、鳥居や囲垣などの赤い漆はもろんのこと、その他の余り目立たないパーツも同じように丁寧に均一に仕上げられています。

6 金箔押し

漆塗りが仕上がった後に、キャリア40年以上の神輿の箔押し師が金箔を貼っていきます。金箔は神輿の屋根の側面にあたる軒面のきり、屋根の下に位置する桁組ますぐみ、神輿の中央に位置する胴などに貼っていきます。

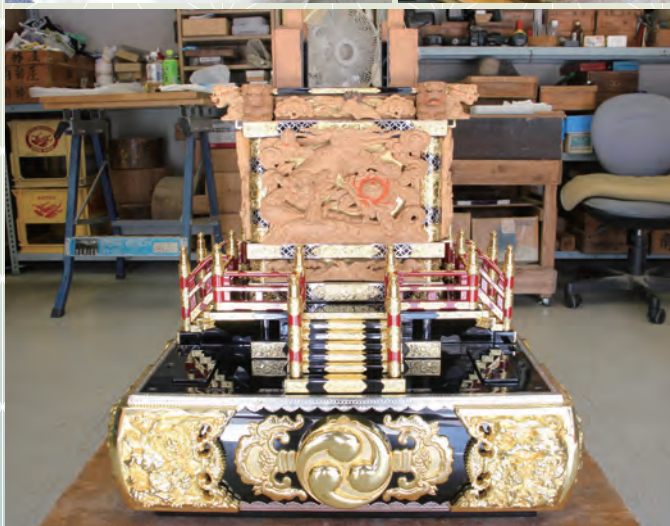
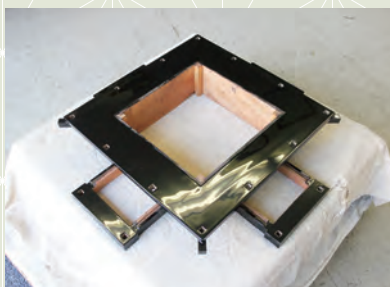
金箔は1枚毎に綿で押さえて乾燥させ、刷毛などで丁寧に仕上げしていきます。御神輿をご覧になる際、軒面や桁組の金箔は目に入りやすいですが、屋根最上部の露板や胴周りに付いている彫刻の裏側にも金箔が貼ってあります。新造された御神輿をご覧になる際には、彫刻の奥にも金箔が貼ってあるのかを是非確かめて見て下さい。因みに金箔を貼ることを業界用語では「金箔押し」と呼びます。

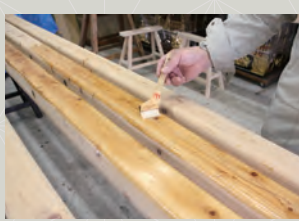
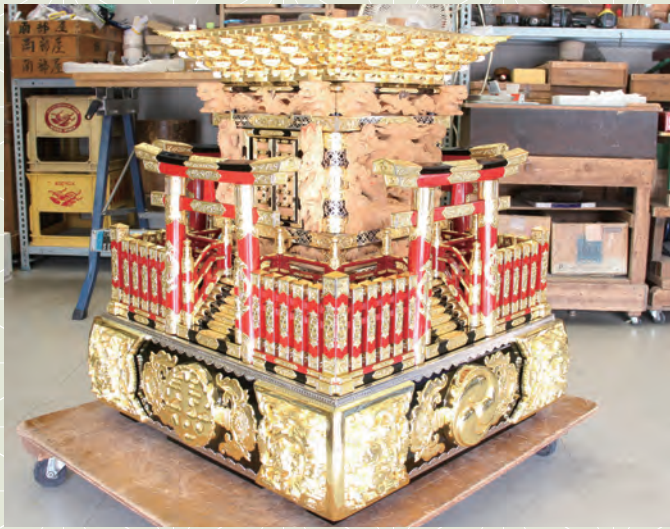


7 組立て

漆塗り・金具にメッキ加工などの工程が終わると、最終段階の組立てとなります。鋳物や鋳り金具、彫刻を台輪・胴・屋根などに取付けます。台輪・胴・桁組などを組立てた後、屋根を乗せ、柱の締めまりや全体のバランスなどを調節し、完成となります。

御神輿本体や大鳥・小鳥・環よら瑠などに打ち付けたり、組み立てる金具は1,800点に及びます。塗りが上がったパーツに手作業で金具を打ち付けるので、細心の注意を払いながら作業を進めます。特に屋根への金具の取付けは、曲面ということでより慎重に行います。また胴の部分は金箔押しの上に彫刻を取り付けたり、細かな金具を多数取り付けるため、時間を掛けて行います。



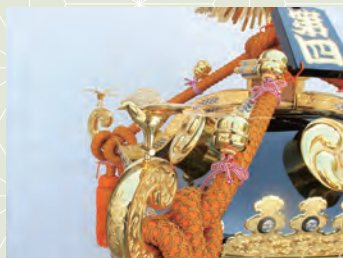


古い神輿の一部を残す

諸先輩方が作られた古い神輿の一部である担ぎ棒や駒札を、新しく造る御神輿に生かすことはできないかと考え、南部屋さんに相談をしたところ、担ぎ棒は、一度表面を削り、割れ目が広がっている箇所は木を埋めて補修をしました。

また、大棒(担ぎ棒)の先端に取り付ける棒先金具を比較的スムーズに取外し可能にするために、大棒の両端は少し細く調整しました。

駒札は、黒い本漆を新たに塗り直し、文字部分は本金箔を押し直しました。裏面には古い神輿の制作年月日と制作者名が書かれていたので、手を加えずに残すことにしました。



8 完成

